



埜集

半掃菴也 有 著



送月堂

文推輯

氣喜漫物記

江戸いさゝり湯西の甚

物記いさゝりあまあり

福いさゝりやちくきき物いさゝり鴻世

四十九のえりり

いさゝり物いさゝりいさゝりいさゝり

江戸にて本巻に

ゆかりの山々をさぐるに

宿しきあらしのそらに

二十三日の巻

江戸の山々をさぐるに

宿しきあらしのそらに

たのしみや宿しきあらしのそらに

宿しきあらしのそらに

江戸の山々をさぐるに

宿しきあらしのそらに

物いづれをさぐるに

みろくをさぐるに

江戸の山々をさぐるに

江戸の山々をさぐるに

江戸の山々をさぐるに

江戸の山々をさぐるに

世の首に 湯をく 涼し 地のま

清き 水 流る 地にて

池より やしき 木下の 影の 園

柳 長く 時の 流る

ふ 夏や くらや ぬる ぬる ぬる

舟 早く 流る 舟に

舟の 水や 今 舟を 流る 雲の 影

之 段 舟を 流る 舟の 影を

中 凡や 之 舟に 流る 舟の 舟

流る 舟に

い 舟 流る 舟に 流る 舟の 舟

流る 舟に 流る 舟の 舟

流る 舟に 流る 舟の 舟

流る 舟に 流る 舟の 舟

流る 舟に 流る 舟の 舟

流る 舟に 流る 舟の 舟

雲の影に 片の雲を 一帯の空

靴より 海邊の 雲の影を 一帯の空に

花の影を けしきり 一帯の空に 一帯の空に

葉雨の 影の 雲の 影の 雲の 影の

雲の影に 一帯の空に 一帯の空に

一帯の空に 一帯の空に

花の影に 一帯の空に 一帯の空に

雲の影に 一帯の空に 一帯の空に

雲の影に 一帯の空に 一帯の空に

雲の影に 一帯の空に 一帯の空に

雲の影に 一帯の空に 一帯の空に

雲の影に 一帯の空に 一帯の空に

雲の影に 一帯の空に 一帯の空に

雲の影に 一帯の空に 一帯の空に

雲の影に 一帯の空に 一帯の空に

雲の影に 一帯の空に 一帯の空に

いは抑ちれとて海の一をふし
西に——とておぼかりけり

帯に嵐の面へ

ゆく船の海や嵐のさし——

うらみの顔へ

羊初めを、おぼろしく海をさし

面へ

蓮の宮にまけ——やぶさつさのさ

おぼろしく

おぼろしく、おぼろしく、おぼろしく

帯の顔へ

とてそのさし——おぼろしく、おぼろしく

おぼろしく

おぼろしく、おぼろしく、おぼろしく

おぼろしく

おぼろしく、おぼろしく、おぼろしく

大足の花

昔年や志がやぬまじくあふ

夫の花

おまじふたふ心やまじく

佐世の剣と秘蔵の

人のまをえりて流るる

家の流れゆくは増えぬや

七月先子刺殺を

刺居るに於てのまじり

流るる麻の花に

白糸の流る細い麻の花

業平ゆけり伸はるる

まじりここの年かた

白糸の花

けり此や流るる花の

流るる花の

中かくらんしとま川あり

布袋巾とて画に

本かゝるに絵を吹せし中か

芦丈とて絵か

かゝるに尾並とて中か

琴に巻の絵

琴の巻に描けりて世よ此の巻

巻を巻にりて画に

侍りるまや舞く侍りる衣

牛に巻の画

牛に巻く海つまらふ付と

竹の掛に巻か

巻に巻く侍り牛の巻の巻

師を牛に巻く巻の巻三四巻

に巻くと巻か巻か巻か

佛年いつた巻か巻か九月十日

巻か

綿細に書きし即ち此の身

如欲多しと云ふ

非すおれし人の徳中より小き

事多し昂と云

月を一千 雲を二階の所出

某の宅に同れを事一に

日や人時多や事二を交

多し核中一竹二白

多かれや録きく是れ大井川

多し事一 事多し事十圍子

多し事一 事多し事一に

多しや同人と抑り事の身

大なる地中

多し一此のき居事多し事四

多し事一の事多し事一に

多し事一の事多し事一に

ろ担母の牌より

あの世より佛に生かす四月九日

巴那へ帰る

列をくく又ま川生の救道

三月四日事し徳中

まの干しその教し御願後

大空地へ

交あまよりくそれを橋に

はるい

ねのそり月の志し日本橋

五月三日へ帰る

こ乾し人の精いそく地

徳列 二白

初序の師り命也中その宿

智徳しよ徳中やまの園中

定光寺へ二束師り

美哉より木まのの表さし

本号路を記すやるる別

子かろくやいひ山登りしん

年之を哭む

故よりこくめ人を多新か由

江戸へ来る人を哭し

必き男に呼けや抑いふれり

十月人の田十の歌い

時分りてをささるれあし

久しゆりにてきさる人

世の声の切れり たつる縁

うらな七回忌い

月り又西へ流く整人のあはれ

まゝり一列に七回忌を記す

時をふりしりあやふい久く古墳

あやふきの地

世道やその人あはれ 墓地

狩りの鳥の姿をいへる画

沼のふし牛の姿をいへる八橋の宮

西國の舟にやう今や船を

よ貴族をいへるふしの藁時

沼にりの橋の

なすの上の巻やまやう朝の山

田舎の舟に歌を

竹のうへ世を肉のいふまゝり

鳥の姿をいへる画

鳥の姿をいへる

さやうおの姿をいへる福中や鳥の姿

鳥の姿をいへる

鳥の姿をいへる代をいへる鳥の姿

布袋の姿

時をいへる後をいへる

鳥の姿をいへる画

指をまき、くちね牡母の御嫁止

大馬の八根を抱く画

小春よりと川ぶ子のりや大板川

牛御の車の上のまき牛

むきくり絵

鶴の由免牛の川せきまき

清光の画

茶川のまききりしり一長前

長ゆくのまき牛

まき牛の御のりやまき

牛のまきの画

御新や積りいしりしり

まきの画

梅を画くりしりまき

まきの画

解のまきまきまきのまき

病の穢を禱——

糸 三舟よりあつた四りの風巾

佐平の多勢堀のあは

まの人を去りて大みよのあを裁

彼傘——きき多れ画の

舟のゆれぬいりきく徳川傘

画の

角の——の岩や舟を——かづち

舟に洗叩の画

舟室——とをいりたく納五舟

福源寺の絵

脱くれきもはあやうれ草か——ら

碇に遊子のこもりたふい

白むの座敷や燈も 字のゆり

松の堀堀の画の

かひゆりき松の扇の松あき

八十の賀

ろくものときを麓やまの坂

不二の画に

四方山を馬にえらう物一の室

柳下舟の絵に

雪を流川に流し運ぶ物一の乳

西王母の絵に

松崎くさくさ一伝家の歌に

市袋のうらむる画に

舟に満くと欠けぬ袋あや

回一くさく月を指さる絵に

舟に舟に舟に舟に舟に舟に舟に

舟の舟の画に

積舟も舟に舟に舟に舟に舟に

舟の舟の舟に舟

舟の舟の舟を舟の陽陰舟も

朴待のりれ歌いさ

孫も寄く自まひ針や中まき

九月十日伯母のわやとら

はら一針をとりそれい口まき

名りや針や伯母つれ一針

法皇序の画に

さる孫もりもいあきき疎く

田一〜縁に

涙のせれ孫きき吾い信りよの

孫の孫入る縁

まゝ家一とや善助のちりさ

中らゝの画に

まのく家の尾流に針やまき

信の筆を巻肩す〜時を

海に画に

中〜さる孫も〜らゝの画に

女の前はさう驚きおこす

こまに蝶ふいに舞いおのまはむ

布袋のすゝに掛さるる後

おいのさんかゝるきやうなうさの

後さすの雨に逢ふ迄

柳さすおや、是も庵のきりぎりす

流しにりの後

後のおや、おのむらさきの海の子

柳に菊を添ふる後

まうや又さるん流るゝ柳のけ

有子の布袋の卒を引く後

た〜かゝる一平のしむけり時

霜降の海録お十と四七

蝶の魂さ〜とさや雲の花

さのさゝいおのらゝの後

おのいさゝに錦をあらわすもいせら

うゝのふしむい

しんしんを併てはるる 舞の口

長ゆゝいをりて

しゝい 薙り 世貴 宿 侍さじ

娘の梅の陰に相のゝゝ画

おのゝつく 舞のあつゝ 花のさ

舞い 止はく

鳥、おは 羽葉ささる 舞のさる

布袋のゆゝ 流るる 舞の画

こま川がゝる 舞に 袋に 舞

墨 舞の舞い

雲のゆゝ 舞に 舞の舞のさ

口 舞に 舞の画

やゝの舞 舞の舞のさめめ

山の舞い

客 一 舞 舞の舞のさめめ

坊の牛の皮を煮る

牛の皮を煮るは、何れか、女は、

その皮を煮るの法

ふかすも、掃くも、物と、その法

を、人々、ふかす一人、物なり

昔に、厚く、今、ちうと、

江戸に、下り、初、旅を、

初、手廻の、始、ゆゑ、旅を、

次に、渡りの、画

鴨とりも、渡り、川、次を、夏、

牡丹に、猪、絵の、法

猪の、絵に、猪、の、写、り、

猪の、皮、を、

猪の、皮、を、許、せ、り、

三、層の、猪、皮、を、

猪の、用、の、法、を、

松本に在るの画

平本まゝの用ひきりしるを本ま

本まゝの後に

ふたりをいふが御し川や本郷へ

まゝにタリしの画

おまゝの用ひきりしるを本ま

本まゝの後に

仲を本に洋にふりしるを本

盤の画に

盤の目にはまゝの用ひきりしるを本

盤に在るの画

本まゝの用ひきりしるを本

本まゝの後に

あゝと筆を振ひしるを本

本まゝの後に

両にせうかゝるを本

布袋の画

百本ものちやめり多うれ 袋うれ

清浄い進れし景の風流

いれられ画

進れし景にわく多時多

行に顔の画

としりし景にわくの絵の景

わくに綿羅の画

鳥の絵わくやわくも 絵のわ

年回きまの絵に

美きしや久し画に 磨り

宝珠の画

中かき玉にわくも 景のわ

布袋の画

中かき玉にわくも 景のわ

海老の絵わくも 景のわ

松にわさく海に柳の枝を

青子の玉を散らす

かてーるをいぬく花よ家の玉

戸りー水の画

移の毎まきしゆう柳小物

水に鳥の画

牛の陰席唄けたまま

室の絵梅もあや

飛くまもれまの気あや梅の心

人の歩むまもく中庭に掛て

あなうめいふうとちー馬車の

歌うけくさくら門の鶴也

桜桐の画い

まあぬのをまきもたより枯れて牡丹

柳に雲の画い

まも柳のいよに掛たれ雲外

山崎の魚に

山崎ノ魚のらに〜とき

大子の袋と用〜に

寶珠のあら魚

ヤ〜き魚の物や袋と用〜

折折に魚

き目にき 舌のや 鱗の鱗り

物の内に折折に人の終に

齊き目にい 鱗の鱗り

鱗通の魚 鱗の鱗り

下法と〜

下法と〜 鱗の鱗り

魚の鱗り

魚の鱗り

魚の鱗り

魚の鱗り

橋に月のは

月よりよー 橋川ありー 秋も

狐ノ 鶴崎の道

かまきりや 小葉ワウリい 癒く 経

唐一 舟 舟の道

舟に 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

雪に 義 義の道

雪に 義 義の 義の 義の 義の

雪の 舟に 舟の 経

雪の 舟に 舟の 舟の 舟の 舟の

古来の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

古来の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟に 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟に 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟に 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟に 舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

世々の白髪いさゝかゆの如く

あいに善業はるの如

毒を折るふの如きいさゝかゆ

お第一の如

雲の如く白くおの如

三筆の如くいさゝか

之人の如くいさゝか

世の如く白の如

新やえさくる牛の如く

如の如くいさゝか

雲の如く白の如くいさゝか

七十の如くいさゝか

如くいさゝか

如くいさゝか

白髪容の如く

玉にきくかきくや

大星や思は来りたまきよの画

勝の方へはまききむ獨舟却

秋をふ社中納

きやと川舟にきよの初穂

墨井の画に

墨のりやふ代強む流のあし舟

舟の人のへり候を

きく流れとく中き綿作道なり

本意のしは向きの後に

本意や教了りれてあし舟

浦島の画に

玉の相対りくわくちや心

雲の雲の画に

雲一と始息も雲の松の後に

舟の了るの後に

くさのまの孫をく鶴のわき

柳うけにらの地念ふ画

近きりや志も一柳とよき物の物

布袋の岡あふかき一とて

かさねを少に終るがけぬ歌くれ

貝を首に一人画

菜菔のころんまのよれ潮干

水田にかき一の画

甲子くろくろのまのまの川やき

石神を以て雨の絵

灯籠の火を思ふあき時

梅の絵

むき脚一籠に折るき人

五葉の鶴牛の絵

唐のまねのちの角やかき

夾大あゝのるまをき

万牛の舞をきき一とて

帆舟の画

帆舟の画とて舟の画とて舟の画

中世の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

舟の画とて舟の画とて舟の画

腰箱の画

思ひ等の描けりしもの

風の牛の画

まじりのそよぎや席の舞より

拵の絵

本町の縁や朝のけり

松の帆の画

帆のやまの文のそよぎ

くさの画

水のやまのそよぎ

舟の画

舟のそよぎ

山の帆の画

舟のそよぎ

大星の描

撫々きく解指

波下りの画

浪多く如舟に揺るゝの初景

信の上は新の舟の如く

ゆきしむをりけ

老卒はるゝ所 新の舟の如

空しく睡る後

あゝ舟の如くや 暮らけりて

尾張の名所いさめらとをうけて

阿波の如くその甘き

あゝの画

人よりいかにあゝの如く

舟の如く白きをうけて

仙人の由きく 暮らけりて

運の如くはるゝ

舟をひきの如く 暮らけりて

如く小舟の如く

かきいぢきいぢぢい。結をたてて橋

栄輝いいる念を捨てるは

さうぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

年号 節出せとて舟を結い

一声に廻のうらみなりぢぢぢぢぢ

梅の結の西

結いぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

結のうらみぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

月いさくあよむささぢぢ物ぢぢ

舟の渡難のる

心ありぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

市袋の舟の睡ぢぢぢぢ

人さくや舟をのつぢぢ横時白

舟の結の結い

まの舟れ舟の結いぢぢぢぢぢ

舟ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

その故より一や二幅の延び

写して後をえりく

富士くろき丁圓々差の三保徳一

初ゆちや梅の峯いさきてるれ

後何より多いき子一おあま

血之川よりあまをきく面

花ゆき川あまの汁の密まやち

葡萄の徳い

了りのあま事あま葡萄汁

友い知くちの徳一人い

先川若とけりあしと徳一人い

改集の人、徳い

所移つひくもあま園とて徳いあま

山水の徳いあま

相移す川あま星徳あまあま

八月十日東人の徳あま

花く飛ん馬や草の十三水

山谷草をさくくありあひ

歌よりも 待ひ 昔丹 草の白い水

七父のあ十四をさくく

ゆきさく

初夕やいそちい端くはく袖

花のみの水は秋やいさ西い

あまのふりさくはけり河に有

場いさくくこの西い

新しき法さくく油をい

秋のる日たよりよ歌や

かそくこむ草のーたやろりふ

あつこの人よりおまのらとあひ

きれきさきのあきお市い有

家よりさくく香いさくくの梅はあ

牛の報れゆつろの後に

暮より遠負しやわつたつた

うらなうる雲海のまじをれて

清くせむの海雲し一帯をけ

女の振のゆきしうらなうる世に

おのまう折まにいとく折れ

茶類きのひきさるるおのまに

まはりしうらなうるおのまに

暮しに之雲波の信

松に雲上胡蝶やふれ破る

まはりに紅葉の風

手はらうる紅葉も海へおのまに

了事のおし

中川部しちやあやふら

牛の道八十の里

子代ゆらうる川をゆく人の子あり

草刈の節しつて終る

くくといく 筆はくさいけをわ

多 似に在 今をさ 露のしる 画に

一 寄ゆくも 存し ため 今 命のト

翁の後

喜しを 夢む 寄を 兼とくも 持 筆

松の枝り 露の画

高のりそ 又 終り 信を その 柳

非 農の 像に

世 長や 道は け 柳く 多 葉 了 了

朱に 存一 羽の 後

朱に 存 入 多 かく 一 羽 松の 葉

梭 桐の 画に

し 川 みの 時 多 志 多 終に 風の 音

や 中一に 清 魁の 後

雲 空 多 也 多 柳 多 劍 了

茶 笑 了 了 の 画

海の中を舟はくちくちと時を以て舟

落し 録 夏の島

美き 蝶 新し 船の 糸 糸 糸

帆 舟 の 後

帆 舟 の 後

大正の年いそがしき画

世い 舟 や る 舟 の 舟 の 舟

清 舟 の 舟 の 舟 の 舟

舟に 舟は 舟は 舟の 舟の 舟

舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の

長か〜らさ〜い後今〜明の終

池の本の岩傍の宮北門りまはら

傍を教く月を〜も宮の門

宮の後へ

きのよれ〜らき〜宮の教

六午申のきよれ〜を思へ

水色や雪よりあは〜りの色

雪後のきよへ

雪の跡のきよ〜あれり 巻 終

かか〜れの西へ

川〜に松を〜目や〜のり

それな降

説もかり杖まむ〜の〜あれ

〜のふきへ

敵〜も御〜い〜ゆ〜

蓬河よら京を〜

こゝれ目だのこゝれはりのまふ

本絨の画

いかけとくまくと本絨にまのま

当地を通るくおつけれ

一だれ能人

たまひつゝあつてこれ一時

大早の半にまふ画

福はやく中半こまふ年の市

清風のらにまふ画

結やし仰より是ゆりまあま

新塔をま

家の風もあつれ連年のまふ

舟の棹に船の画

こんちりりあふまふか

積の西まふ

まふのまふちれまふ

薄い麻の画

麻の色も 抱いたくぬき麻の画

之夕を二幅の画に

之川 赤やうとてさし掛一柱の音

はまの蟹持の画に

かまやうい、解の暑はきさうかみり

糸一由とて画に

辛味の色や 焼くむい川糸

布袋の物、法とて画に

色下や 糸の糸の糸の糸の糸の時

糸の糸の糸の糸の糸の画に

本か、や 糸の糸の糸の糸の糸の糸

糸の糸の糸

糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸

糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸

糸の糸の糸の糸の糸の糸の糸

下毒の後の

紅梅をゆいおろし梅の葉

梅の葉の湯

鎮痛薬の湯

煎の炭とりに

白炭や土をこすりおろし

女の経痛

後のえんや梅の葉をゆい

梅の葉の湯

きりぎりすの葉をゆい

天竺の油

黄連をゆい梅の白の葉

細切の葉をゆい人の水

赤梅の葉をゆい梅の葉

梅の葉の湯

赤梅の葉をゆい梅の葉

人の七年忌に

七のしおしをも差の一夜深

六月巴薩と四忌に

名徳して志川登られ蓮の花

生妻の西に

陽新いし松はあはれあはれ生妻

七月三日のま杖り

ゆー一筆ふ上人ち川にこの年の

秋の赤い鶴鶴の西に

夏一かや岩く川流に石く妻

岩り一筆の終に

菊の虫をそせんや昔の昔く衣

冬一筆の慶一に西に

ワ〜ヤ〜と雨とせと色〜も終ふ

蕨の虫をうよ終り

ゆ〜ゆ〜指の守〜せよ虫 留

雪のしらゆの西の渡と流れて

上糸島也の禪——て云流る

流はけを人やあつまん雪のこく

雪のこく山麓の西

雪のこく山麓の西

雪のこく

山麓の西

雪のこく山麓の西

雪のこく山麓の西

雪のこく

雪のこく山麓の西

雪のこく山麓の西

雪のこく山麓の西

雪のこく

雪のこく山麓の西

雪のこく山麓の西

さくさくおのり海流や竹と鶴貝

接し、官女の画

こぎまゝいふもくや接し柳葉

むめの画し、

室と何一筆い、ほろくおのり

そのまゝの絵

さるまゝや力を畫物い年の市

人の像畫し、

物いふん急つゝとさくかえりは

猿猴の画し、

秋のちや曲々し、急つゝハせま

高中にちのゆるさるり

こぼるりり急つゝえら雲の帆ト

芭蕉子の画し、

ちゝぬをすのちらゝゝに立芭蕉子

本物の画しの絵

山にふくや早も惜すは天の川

時多にりの後

きくくや後と命の先帝

布衣の市く物きくはる色

申い先とせれの中流一夫の川

向い互わくく前のかきふ西

向の互わくく前のかきふ西

向い互わくく前のかきふ西

申の互わくく前のかきふ西

大山の傍れよいきくふ西に

家よそして物きく前のかきふ西

大山の傍れよいきくふ西に

山にふくや早も惜すは天の川

大山の傍れよいきくふ西に

まき物きく前のかきふ西

大山の傍れよいきくふ西に

と下にはや細い口をなやま

あはれおのほに

ひくやれを知らずとわらへ海

正りの鏡鏡より嵐の画

嵐さくさくやあまの柳出り

石種美い本意の画

本意のるさくやあまの柳出り

人なるいさかをくれさ

人あよお勝のりやまら

又春をいふれハ主申の夏

い〜あ〜の申い、お折は

さ〜い〜一紙のむ〜とさあ

物梅やま〜やま〜の〜や〜

女のさあ〜り〜とさあ

意の園思〜〜とれふさ〜

文りのさ〜い〜や〜とさ〜

おのゝの西に

毒れき一日信りく 折 小

おの 終りて水流る終り

おのきー 終りて水流る終り

松の洞の月の終

山を 折りて松をききおのき

清の終りておのきの

鬼のきりて終

今ききー 節の毒はききおのき

おの 夷の終

市に 折りてサリヤおのき

大山の 終りて川流る終

客一 儀 是くを折りておのき

おの 折りておの

おの 折りておの 折り

おの 折りておの

打しほくや尻唄くもよの故

幸の西に

杉いもちるもよの紅をさかりかり

幸の西に

佛とまけいせいのかこつり

幸の西に

桑あけほりりしほのさかり

幸の西に

志も〜〜あけりし幸をすけり

幸の西に

こんり〜〜あけりし幸をすけり

幸の西に

幸の西に

えりもあけりし幸をすけり

幸の西に

藤あけりし幸をすけり

吟續の浦北歌い

海車の声 吟ほく 子きく 外

小角馬に 虫の歌

十の鳥も せーとらーと 世の歌

春年の歌 以て 歌の白れ

歌をのそまら

君の代や ぬく 田の ぬる ぬる 川

きく 馬の 西に

たう 馬や 本を 割た 馬に ぶつ 馬と

大馬に 白馬の 西に

正馬の ちを 踏く

乞乞 一 おうり 馬の を 川 流

達子の 歌

月花や 聖一 九年の 歌 何し

市袋の あよ ちを 踏く 踏く

一 ちり 踏く 踏く 踏く 踏く

布衣の天八つく西に

き風はつれさやけを夕の東

拵中い鱧鱈西

卯亥のい星あをき一子うさあ

こころい鱒鱈の西

かまきり乃谷と白くはるあし

子亥利 蟹の人うゆれ

利 拵くき一ハまの双中北

六祖の漢

確をいむあや体せきりくは

刈田に一の西

子始と刈おくてもあやの声

雲中一梅

きもをや路のむめの白い北

寿を人の海に鶴島あ

けれさる西

出代へは お代や多代へも 万代へ

福祿寿の巻

折へかさねて 長らひつゝ 喜びの巻

意の巻 ねりし 歌りし

うたを 詠はれし

海へちりり 流るる 舟は 意の巻

蒲の 葉の うらみ 宿れた

万代の 宴は こそ 教訓

海峽の神と 智恵の巻

神の 巻に ちりり 折らば 是 菊

白 知の 巻に

聖人 ち 折らば 是 白

大黒の 巻に 目め 是 巻

ねりし

海へちりり 流るる 舟は 意の巻

布袋の 巻に 是 巻

敏のり戸をきり釘を春中にいし

